

初心に帰る



函館市医師会
函館脳神経外科病院

やま さき たか あき
山 崎 貴 明

まさか北海道医報に執筆することになるとは。この原稿依頼が来て初めて2023年は卯年であることに気が付く始末です。年男とはいっても未だ医師になった24歳の気持ちでいましたが、もう48歳になんてすね。

さてせっかくですので少し大学時代から研修医を振り返ってみます。私は1975年生まれで生まれも育ちも埼玉県です。埼玉県といってもその県境で、東京に隣接するベッドタウンで育ちました。いろいろな事情で医学部に行くというのは予定外だったのですが、運命のいたずらで、自宅から近い日本医科大学に入学しました。ボート部（漕艇部）に所属し、埼玉県の戸田漕艇場にある合宿所での生活を送っていました。当初ボートをやりたかったわけではありましたが、強烈な勧誘で引き込まれ、先輩から代々受け継がれた、汗がたくさんしみ込み茶色く重たいせんべい布団が支給され、クルーを編成され、脱出困難な状況となりました。一年生の東医体が終わったら抜け出そうと思っていたのですが、対抗クルーのメンバーに入れられてしまい完全にボート部員となってしまいました。結局6年生の東医体まで出てしまいました。ただここで出会った先輩、後輩と普通の大学生活では得られない強い絆、どんなに辛くても逃げ出さない精神力、そしてあまり好きでないことも一生懸命やっていると自然と好きになってくることもあるといったことを学び、その後の自分の人生に大きな影響を及ぼしたものと思っています。

一方当時の大学はおおらかだったので、授業は出なくても大丈夫でしたし、定期試験も試験直前に出回る資料を一夜漬けで叩き込んで、そのまま吐き出すだけで大丈夫でした。そのため部活中心の生活で、空いた時間は友達といろいろなところに行ったり、バイトしたりと学業の面ではのんびりした大学生活を送ることができました。

こんな自由な大学生活を謳歌し、24歳で大学を卒業、何も考えることなく大学病院の研修医となったわけです。当時はまだ現在の臨床研修医制度が開始される前で、その移行期ということもあり2～3ヵ月毎に各診療科を回るスーパーローテーションの研修システムに入りました。しかし大学からの月給は47,500円、奨学金の返済もあり医師になったという嬉しさ以上に経済的困窮、そして医者理想と現実のギャップの大きさに毎日が辛かったことしか覚え

ていません。朝からひたすらカルテ作成、伝票整理、温度板作成、プレゼン準備、検査枠の押さえなど、今思えば医者でなくてもいいような仕事がほとんどで、体のいい安月給の雑用係といったところでしょうか。ボロボロの白衣で院内を駆けずり回っていました。医者になったら学問的な生活、そして華やかな手術も普通に頑張っただけでいられるようになると思い期待に胸を膨らませたのも、妄想であつたと現実を突きつけられたわけです。時間も金もやりがいもない仕事で、医者になったのを後悔する日々が続きました。転機が来たのでは半年ほど経って、当直バイトが解禁されたときです。大学病院ではみんなから雑魚のような扱いをされていた研修医が、当直病院に行くとその時間は施設の最高責任者になることができます。ローテーション先の診療科によっては、夕方からは仕事さえ終わってればフリーとなることも多く、大学の仕事を勤務時間内で必死に終わらせ、ほぼ毎日当直医マニュアル、基本手技本、糸結びの練習の糸、持針器、鑷子を持って当直に行くようになりました。家で寝てもお金はもらえないし何も経験できないので頼まれたバイトはスケジュールが空いていたらすべて受けました。特にみんなが敬遠する忙しい救急病院の当直は、バイト代が良く、多くの疾患の経験が積めるので一石二鳥と積極的に行きました。救急蘇生処置から多種基本手技、内科疾患など当直医マニュアル、基本手技本を読み込み何でもやりました。事前の十分な準備、それを必要としている患者さんが来たら問題なく遂行するというのを、背水の陣で生きていたあの時に学び、今でもその経験は生かされているのだと思います。

脳卒中の外科治療ができる脳神経外科医になるのが私の目標でした。大学病院での生活も軌道に乗って楽しくなってきたわけですが、このままでは目標の達成は厳しいと考えるに至りました。研修医終了と同時に、北海道に渡り札幌の中村記念病院にお世話になりました。そして、現在、函館脳神経外科病院で勤務させていただいている次第です。次の年男は還暦の60歳。あの必死に頑張った24歳の気持ちを忘れずにいられたら幸せだなと思いつつ、北海道に来てお世話になった多くの先生方に感謝し、私の新春随想を終わりとさせていただきます。